



第2580地区 東京豊島東ロータリークラブ

WEEKLY REPORT

創立/1986年2月19日 (会長)稲川 一 (幹事)月井 雅夫
例会場/〒171-8505 東京都豊島区西池袋1-6-1 ホテルメトロポリタン TEL 03-3980-1111
事務所/〒171-0021 東京都豊島区西池袋2-29-14-101 TEL 03-3985-7577 FAX 03-3590-6644
HP <http://www.toshimah-rc.jp> E-mail info@toshimah-rc.jp

第 1291 回例会

2013 年 6 月 12 日

本日のプログラム

例 会 12:30～13:30

ホームミーティングの報告

A班 浅原英明会員

B班 時友雅行会員

C班 佐野明三郎会員

次回のプログラム

例 会 12:30～13:30

卓 話 仏教美術に魅せられた私

米山奨学生(大正大学大学院修士課程)

金順子さん

紹介者 村山圭治カウンセラー

クラブ協議会(新旧合同)

13:30～

本日のソングリーダー 西島 貞枝会員

●先週の例会報告 2013 年 6 月 5 日

会 長 報 告

- ①米山奨学生キム・スンジャさんに6月分の奨学金をお渡しいたします。
- ②本日、高木北分区ガバナー補佐、岡北分区幹事、鈴木分区副幹事がお見えですのご挨拶をお願いします。

幹 事 報 告

- ◎次週の新旧合同のクラブ協議会は都合により19日の例会後に変更致します。新旧の委員長には改めてご連絡を致しますが、ご出席下さるようお願い致します。

■ゲスト

株式会社ジャスティスハウス 海外事業部マネージャー

バウティスタマリッサ様

北分区ガバナー補佐

高木 義雄様

北分区幹事

岡 秀一様

北分区副幹事

鈴木 憲興様

米山奨学生

金 順子さん



ガバナー補佐訪問

■ビジター

東京練馬中央 RC

井上 浩様

//

萬 五月様

//

氏家 茂美様

//

市河 久和様

■出席報告

会 員	出席参加 会員数	出席数	欠席数	出席率	5月22日分 修正出席率
32名	28名	22名	6名	78.57%	79.31%

ニコニコ BOX

高木義雄ガバナー補佐様・分区幹事・副幹事様より
氏家茂美様/本日は、当クラブが応援している
シューズバンクを卓話に呼んでいただきありが
とうございます。会社一同で応援に来ました。
シューズバンクとかけて、ワールドカップ出場
が決まったサッカーとときます。心はよく聞く
(キック)と成功します。

稲川会員/サッカー・ワールドカップ出場決定にバ
ンザイ!!

島田会員/今月で63才になりました。人生早いで
すねー!!

吉田会員/ホームミーティングでニコニコしなさい
と言われたのでニコニコします。

西島会員/お誕生日お祝い有難うご座居ました。

有我会員/結婚記念日のお祝いありがとうございました。
おかげ様でこの日だけは夫婦仲良く過ご
せました(笑)

櫛田会員/今月妻の誕生月!日々幸せに暮らせるの
は彼女のお陰と感謝しております。(なが生き
の秘けつでしょうか?)

第12回定例理事会議事録

開催日時：

平成25年6月5日（水） 午前11:15～12:00

開催場所：ホテルメトロポリタン例会場

出席者：稲川会長、廣内副会長、月井幹事、櫛田
会計、滝澤 SAA、村山国際奉仕委員長、榊原
新世代育成委員長、島田前会長、渡辺、村中、
西島、佐々木、有我 欠席者2名

議長：稲川会長

【議題1】会計月次報告

櫛田会計より別紙報告書説明。

理事会承認

【議題2】6月例会スケジュール

卓話者予定

5日 シューズバンクプロジェクト（バギ
オ関係）

12日 ホームミーティング報告会

19日 米山奨学生からの卓話 例会終了後
新旧クラブ協議会

26日 チェンジオーバーナイト

理事会承認

【議題3】チェンジオーバーナイトについて

佐々木親睦委員長より 会費：会員12,000円
ビジター 10,000円 家族 8,000円
コンテンツの発表、案内は来週中に行う。

理事会承認

【議題4】バギオ基金寄付金について

本年度会計から10万円を支出する。

理事会承認

【議題5】インターアクト年次大会協力金について

本年度会計から3万円を支出する。

理事会承認

【議題6】次年度予算について

協議の上、検討をすすめることとする。

理事会承認

【議題7】特別委員会の設置について

将来のクラブのあり方について、渡辺会員を
中心に編成し実行をすすめる。

理事会承認

【その他】

第1290回例会

卓話

シューズバンクのプロジェクトについて

株式会社ジャスティスハウス 海外事業部マネジャー
バウティスタ マリッサ氏



皆様、こんにちは。

豊島東ローターリークラブの、例会に、お招き頂
きまして、有り難うございます。

私、「マリッサ・シューズ・バンク・プロジェクト」
のバウティスタ・マリッサと申します。

皆様の前で、お話をさせて頂く機会を、与えて頂いた事を大変光栄に思います。

しかし、ローターリークラブの皆様の前で、「卓話」
など、私には、恐れ多く、今まさに緊張のピークで
す。是非、暖かい目で、見守ってください。

「マリッサ・シューズ・バンク・プロジェクト」の始
まりは「バギオ基金」の前川会長との出会いから、始
まります。

フィリピンのバギオに、住んでいた多くの日系人が、
戦後に迫害を受けていた時がありました。

山奥に逃げていた日系人を、一人ずつ救い出したシ

スター海野。日系人の彼らに教育を、受けさせる事
に尽力された。バギオ基金の活動は、そのことから
始まりました。

今では日系人、フィリピン人の区別無く教育の為
の資金を提供する。又、日本への留学を支援する活
動団体です。

その集まりに、初めて参加させて頂いたのが、10
年前。

練馬中央ローターリークラブのメンバーである氏
家氏の通訳として、私は、初めてバギオに行く事に
なりました。

さて、皆さんは、フィリピンという国が何処にあ
るかご存知でしょうか？

フィリピンは、成田から南に4時間でその首都マ
ニラに着きます。

時差は1時間。

面積は、日本の約80%。299,404km²。

日本もフィリピンも、同じような島国です。

その数、日本は、6,852。 フィリピンは、7,107。
又、日本の富士山と同じように、フィリピンにはア
ポ山と云う、2,954mの火山があり、フィリピン
にも地震があります。

人口は、日本の約75%で、95,800,000人。

主食は、お米。その生産量は、日本の、1.4倍の、
10,800,000t。

消費量は、日本の、1.6倍の、13,350,000tです。

GDP、これは日本が、5兆8670億ドル。世界
で3位です。

フィリピンは、2,248億ドル。世界で41位に上がり
ました。

それでも、フィリピンのGDPは、日本の26分の
1です。

一つの国の作るお金が、日本の丁度、福岡県一つ
と同じ経済規模になります。一人当たりに直すと、
2345ドル。世界平均の約20%にしかありません。

非常に、良く似ているアジアの国が、二つ。
その面積も、島の数も、地震があることも、時差も、
人口も、お米を食べる人が住んでいることも。
でも、決定的に違うのは、そのお金を産み出す力で
す。

なぜ、こうなってしまうのでしょうか？
沢山の理由がありますが、敢えて4つだけ挙げてみ
ます。

1つは、
400年に及ぶ、スペインの占領、その後のアメリ
カの占領。日本にも2年間、占領されていました。
「私たちは、貧乏には、慣れているからね」と、そ
んな言葉に現される様に「貧しさ」と「支配」に慣れて
しまったスピリッツ。

2つ目は、
小さい時から色々な言葉を話すきっかけがあるた
め、海外に移住してしまう人が多い事。海外雇用の
安易さに甘んじ、国内での自立産業が發展しません。

実は、1963年までは、フィリピンのG N Pの方が
日本のそれよりも上だったという統計があります。
当時の日本は丁度、高度成長の時期で、一気に 世
界で2位の経済大国になりました。
ところがフィリピンでは、1965年から、マルコス政
権になります。政治の腐敗。1972年の戒厳令。その
事が全てではないのですが、経済は、ストップ
してしまいます。これが、3つ目です。

その政治を、皆んなで変えようとマニラで革命が
起きたのが、丁度27年前の事でした。
だから、フィリピンは平和になってから、まだ27年
しか経っていないとも言えます。本当の平和は、ま
だまだ先の事だと思います。

4つ目のポイント、これが、一番のポイントです
が、教育のシステムが、まだまだ追いついていない
事。しかも、多くの家庭の子供達は、毎日勉強でき
る環境とお金は充分ではありません。

1日、2ドルで生活をしている貧しい人達は、フィ
リピンの人口の約40%を超え、38,000,000人とも云
われています。

車で2時間も走ると、まだ裸足で道を歩く子供達
が大勢います。

話を10年前の初めてのバギオに戻します。
それまでもフィリピンに携わっていた練馬中央
ロータリークラブの氏家氏からバギオ基金に参加し
てみようと思うのでと、現地での通訳を依頼されま
した。

同時、あるミッションも依頼されました。

東北震災の当時、集まった世界中からの義援金。
被災者にその全てが届いていないような感じがする
のは、私だけでしょうか？

フィリピンに対するO D Aの40%は日本からのも
のですが、一向に進まないプロジェクトがあること
も聞いています。

今でこそ、前川会長との間では、笑い話になって
いる事ですが、当時の氏家氏は、バギオ基金に対し、
その基金が確実に届いているのであろうかと、云
う疑惑を持っていたのです。その事を現地で、確認

する事が、私への依頼でした。

10年前の私は、氏家氏が所属する「ロータリーク
ラブ」が、何をする団体で、どのような活動をする
ものなのか、全くその知識がありませんでした。

当然、バギオ基金、又バギオの事。その山奥に日
系人が住んでいた事。

1945年の戦後から、彼らが隠れて生活をし、息を殺
して生きていた事も。

シスター海野の事。彼女が1972年にバギオにきて
からの事まで、知る術さえありませんでした。

日系人の彼らが、シスターに27年の空白の時間を超
え、見つけ出された時の喜びと、その子供達に教育
を受けさせる事が出来ると知った時の喜び。私には
想像さえ出来ない事でした。

フィリピンのバギオは、日本の軽井沢の様な避暑
地的存在です。

セレブなフィリピン人を除いては、バギオは生涯無
縁の町です。

だから、マニラからの交通手段が、7時間もかか
るバス以外に無い事など、知る由もなく、余りの遠
さに疲れ驚くしかありませんでした。しかし、その
驚きは徐々に同乗するロータリアンの方へも向いた
のです。

私よりは間違いなく年配のロータリアンは、飛行
機で5時間に、バスで7時間の行程をこなしている
のです。

見知らぬフィリピン人の為に、フィリピンの山奥
まで。それだけの時間と体力を費やしてまで行うボ
ランティア活動とは、一体何なんだろう？ と、云
う疑問と驚嘆が、私の正直な気持ちでした。

現地での活動に参加する傍ら、子供達の母親に直
接聞いた事から2つの事が判りました。

1つは、バギオ基金は、家庭へのバラ撒き支援は
せずに、確実にそれぞれの小学校に対し、奨学金と
してプールされ、子供達は、学費の心配をせずに勉
強をしていた事。ただ、もう1つの事実は、その奨
学金を受けられる子供の人数には、限りがあると云
う事です。

優秀な子供達は、その学費や留学費を手にする事
ができます。現に、昨年度の留学生は、日本語検定
の1級に、3年で合格するまでに成長し、大学への
進学をしています。しかし、多くの子供達は、その
奨学金制度の事さえ知らないままに成長してゆきま
す。

ただ、奨学金制度に漏れた子供達の中にも、もっ
と勉強をしたいと願う子供達が多くいる事も事実で
す。

さて、では、どの様な方法があるのでしょうか？
氏家氏は、資金面の援助も大切だが、その裾野を広
げる為の、物的支援もあるのではないだろうかと云
う、考えを持ちました。

その事が具現化したのは、私の靴への思い入れでし
た。

小さい頃に、ボロボロになるまで、履き潰し、漸
く母に買ってもらった新しい靴。

嬉々として、買ってもらったその日は、外で履く靴

を家の中で履き、枕元に置いて寝ました。翌朝には、その靴を履いたまま、家の中から外に飛び出した事を思い出します。

たった一日の事です、新しい靴を貰った日は、本当に幸せを感じていました。

「マリッサ・シューズ・バンク・プロジェクト」の始まりでした。

プロジェクトを初めて9年目になります。毎年、フィリピンの田舎町を選んで活動をしています。

最初の頃の失敗は、兎に角、多くの靴やスニーカーを集めて送っていました。すると、フィリピンから「得体の知れない臭いを発するダンボール」が届いたとの連絡を受けます。急遽、現地スタッフが全てのスニーカーを手洗いする手間をかける事になってしまいました。

靴を集める時点で洗浄して集荷する。一足ずつ袋詰めしてから箱詰めにする。

ある時は、人数分の靴を確保したのに、そのサイズの靴が数量不足で、結局、新品の靴を購入する羽目になる等、まさに、手探り状態からの出発でした。

プロジェクトの考え方は、フィリピンだけでなく、日本の子供達へも、ボランティアを通じた教育が出来たらと、云う氏家氏の考えに基づきます。

フィリピンの援助を受ける側の子供達は、援助を受け、靴、鉛筆、ノートを貰い、勉強をしていくでしょう。

でも、彼らに手を差し伸べ、その手を引いているばかりではなく、いつの日にか、その手を離し、後ろから見守るようにしていきたい。いつか、その様な日が来る事を願い乍ら活動をします。片や、日本の、支援をする側の子供達はとうとう。

「飽食の時代」と云われ、お金があれば全ての物が揃い、子供達は、飢餓感を忘れている。親達は、子供に全てを与え続ける。

先日も、練馬区立南田中小学校へ氏家氏と一緒に、靴の提供を依頼する為の説明に伺いました。彼らは、自分達の置かれている環境の事を知り、逆に全く知らなかったフィリピンの事に驚き、興味を示し、その子供達の為に何かをしてあげたい。でもそれは、決して施しではなく「一緒に頑張ろうね」と、云う気持ちを込めたエールである。そんな目の動きを私は見ました。

自分達の気持ちが動く。
自分達で考え、知らない誰かの為に
自分達が応援したいと念う
自分達が行動する

ボランティアスピリッツと、教育の原点の様な気がしました。

毎年、「マリッサ・シューズ・バンク・プロジェクト」としてフィリピンの田舎町に、大きなダンボールを抱えて汗を流しながら運んで頂いているロータリアンの方の背中を私は見ていました。

日本の小学校に行き、頭を下げしてくれる。靴を集める作業は、ロータリアンの奥様方が運んで下さいました。

靴紐だけを買ってきて、取り替える。袋詰めする。箱詰めする。大きなダンボールを運ぶ。子供達に手渡す作業も。ロータリアンの方が、御自分の手でやってくださる、その背中を私はいつも見ていました。

私は、その背中にフィリピン人として、いつも心の中で頭を下げていました。下げた頭が上げられません。感謝の気持ちで一杯です。

私が、ロータリアンの背中を見て感じた事のもう1つは、一人で出来る事は限られています。でも、皆さん一人一人の顔を思い浮かべ、同じ気持ちを持つ仲間と一緒に頑張ってくれる。その仲間の大切さです。

日本には、毛利元就の、3本の矢と、云う話がある事を聞きました。

奇しくも、フィリピンにも同じ様な諺があります。"Gaano man ang tibay ng piling abaka ay wala ring lakas kapag nag-iisa."

「マニラ麻の束が、どんなに丈夫でも、1本になると、その強さがない」

「一人一人」のロータリアンが集めてくれた靴で。

「一人一人」の日本の子供達が自分の気持ちで提供してくれた靴で。

「一足一足」の靴で、子供達がガラス瓶で足を切らないでいてくれる。

「一本」の鉛筆で勉強ができた。

そのプレゼントを貰った子供達が「小さな夢と希望」を持つようになった事が、私には嬉しくて堪りません。

フィリピンまで足を運んで下さったロータリアンの方々の、その姿を見た子供達が、私に尋ねてきました。

「私も勉強して頑張れば、この靴を自分で買えるの？」

「頑張れば何時か、日本に行けますか？」

「あのロータリアンの人のように、私も誰かに靴を贈りたいです」

将来、あの何百人の子供達の中から一人でも多くの子供達が、勉強して偉くなってくれたら。彼らの中に「今日の夕ご飯」の事よりも、「明日のフィリピン」の事を考える子供が、きっと育つと私は信じています。

だから、子供達へのプレゼントは、今もこれからもずっと必要なのだと思います。

その為に私たちにとって大事な事。それは、健康である事だと思います。皆さんの健康と、ロータリークラブの益々の発展を心からお祈り致します。

拙い日本語でのスピーチを最後までお聞き下さって有り難うございました。

Malamin Salamat po.